

福井新聞 2017.05.10
Fukui Shimbun

知覚に挑むストライプ

untitled(2017年、162cm×180cm)



ポップな原色のストライプと円が拮抗するように配置された大胆な画面構成。陰影のような空間性が排除されているにもかかわらず、ストライプのゆがみが風にたなびく旗のような爽快感を錯覚させる。強い

今井さん(福井出身) 東京で新作発表

福井市出身の今井俊介さん(39)は、鮮やかな色のストライプをランダムに組み合わせた、三次元的な絵画を特徴とする画家だ。2014年の公募展をきっかけに注目され、ファッションブランドとのコラボレーションや、大型壁画作品の制作、映像作品の発表など活躍の場を広げてきた。東京・新宿のギャラリーで開催中の3年ぶりの個展「float」では原点に戻り、新作アクリル画6点を発表。色と形のみで構成した一見軽やかでデザイン的な絵画は、平面的可能性に挑戦しながら、見るここの本質を問いつけている。(岩城一彦)

強い色彩、三次元的に構成

untitled(2017年、144cm×115cm)



術教諭だった父隆章さんの影響で、幼いころから絵に親しんだ。武蔵野美術大では油絵を専攻したが「手仕事は苦手だった」。大学では1度しか油絵を描かず、デザインや建築を独自に学んだ。デザインの現場でプロの仕事を目の当たりにして「自分も作る側の人間になりたい」と再び美術を志したが大学4年の秋、大



「この絵の塗りには、10年以上の修練が必要」と語る今井さん。東京・新宿のハギワラプロジェクト

学院合格をきっかけに、画家として生きる覚悟を固めた。その制作手法は独特だ。パソコン上でランダムに配置したストライプを平面に印刷し、それをゆがめることで出来る像の一部分をキャンパスに写し描いている。「抽象画のようで実は具象画。選択と偶然を加味させたこのシステムを使えば、僕でも絵が描けると思った」。キャンパスの表面

だが「無個性を突き詰めれば、それは個性になる」。12年から描き始めたストライプが、今では自身のアイコンとして認知されるまでになった。着想を得たのは、30歳を過ぎて作家としての方向性に煮詰まっていた大学の助手時代。学生がはいっていた幾何学模様のスカートに太陽光が当たり、その美しさに新鮮な感動を覚えた。「世の中にこんなきれいな色と形があるんだから、この模様をそのまま描いてしまえばいい」。日常の体験を平面作品に落とし込んだ軽やかな才能が、新進アーティストを発掘する資生堂ギャラリーの公募展「アートエッグ」で高く評価された。転機となったその公募展を終えた直後に、父隆章さんが病で他界した。北川健次さんや土屋公雄さんから国際的に活躍するアーティストを導いた教育者であり、時に激しくぶつかることもあった。常に道を照らしてくれた父だった。「父が画家として達成できなかったことを、僕が成し遂げたい」。その視線の先には、世界が見えている。

個展は14日まで、東京・新宿の「ハギワラプロジェクト」で開かれている。